

子孫が観音信仰にはいり、大日如来を観世音に置き換え、古墳にもその信仰を表現して輪型を加えたのである。

内竈は古い所である。図田帳にある竈門次郎貞継よりも古い先祖の墓であろう。奈良朝あるいはそれ以前のものかも知れない。

第三段目にある手嶋家は、累代この地に屋敷を構える旧家で、邸前に展開する河を挟む一帯の田地を家産として継承している。古墳は同家の墳墓の地であり、内竈門共同の先祖墓として崇敬すべきものである。

## 別府の鍔絵

こて

鍔絵こてえ 村や町を散策しながら家々の「造り」を観察し

てみると、「オヤツ」と驚かされる庶民の芸術を発見する事がある。「鍔絵」もその一つである。鍔絵が描かれているのは、主に雨戸を収納する戸袋や、土蔵の入口の上の牛木の附近とその反対側、商家の正面上の入口の大壁、農家の馬屋の正面上部の大壁などが多い。

同家は十代前火災のため系図、古文書一切を焼失し、先祖をたどるなものも存在しないのは惜しいことである。

何分にもこの論文が出てから約五〇年経ている。考古学上からもさらにメスを入れるべく、識者に依頼して保存に注意している。

手嶋家は、代々九右衛門某を名乗り、四代前の九右衛門禎蔵は天領地であるが、苗字帯刀を許されて、娘などは高松代官に嫁ぎ、供を連れて高崎越えをする時は、振り向かない者がなかったほど美しい人であったという。

藤 田 洋 三

図から（意匠）も、妻壁に「水」と書いて「火事除け」の祈念をしたもの。水の渦を意匠化した巴紋も見られる。「富貴」を祈願する意匠は「七福神」が一般的であるが、大黒天、恵比寿神の意匠が最も多く、福祿寿や布袋和尚は、大分県全域でも数件みられるのみで、他の毘沙門天、弁財天女、寿老人などは、一件も見かけない。

現状である。

動物では、十二支のうち「虎」と「龍」が最も多い。

これは猛獣を壁に描いて家にしのび寄る「魔もの」を睨み返したいという願いであるという。また「長寿」を願う「鶴・亀」「高砂の翁じじはば」。立身出世などを祈念する「鯉」などがみられる。

農村部では「猿」「鳩」「梅の花」などの珍しい意匠のものがある。「猿」は昔から「牛馬の守り神」でもあり、安産の神でもある。「鳩」は「夫婦和合」・「子孫繁栄」を祈念する図柄で、「火除け」をも意味するといわれている。「梅の花」は「ウメ」が「産め」に通ずるところから「子孫繁栄」を祈念するものと考えられる。珍しいのは「蝙蝠」が日光（陽）を嫌うところから、「蝙蝠」の意匠を描き「火を嫌う」火除け」を表わしたものの。巾着（財布）と形の似ているカブを釘戸に描いて「富」を祈ったり、軒と壁の継ぎ目などの雨漏りのしやすいところに、コウモリ傘の意匠を描いているものもある。このコウモリ傘は、雨を防ぐだけでなく、雨を「アマリア魔」悪魔」にかけて、悪魔のはいり込まぬようと

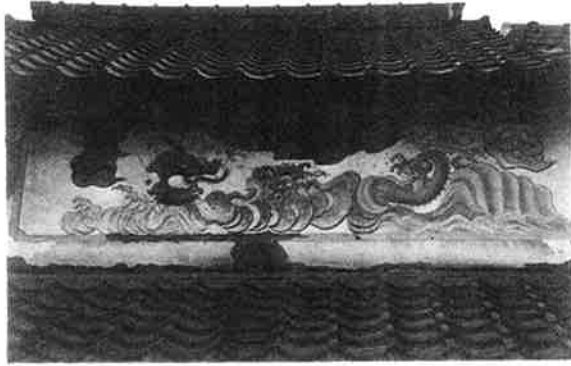
いう判じ絵の意匠である。また火伏せの意匠の蝙蝠の洒落とも考えられる。また山香町野原の帯刀昭司氏家の土蔵のようにローマ字を描いたものなどハイカラなものも見られる。また「仙人が鶴に乗って飛んでいる姿」や「光背をつけた仏から經典を授かっている僧」などの特殊な意匠も稀まれには見られるが、その意匠の意味は明確あきらかには伝承されてなく意味不明であった。

また、土蔵に、その家の家紋を描くところも少なくない。このような「鏝絵」は、家・土蔵を立てる家主の希望や、施工する職人の好みによって様々にかわるであろうが、共通しているのは「この家が多くくの災厄から守られ、家内安全に健康で、子孫繁栄し、いつまでも富貴に暮らせるように」という庶民の念願の表徴ともいえよう。

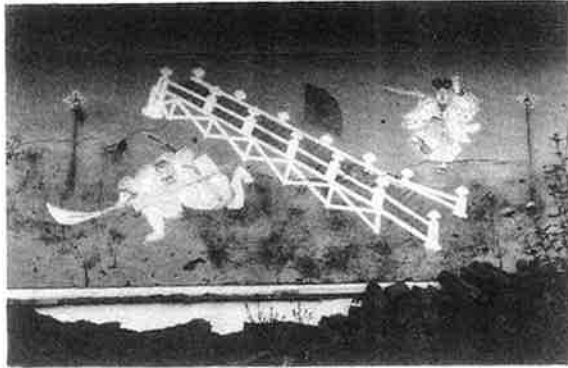
#### 別府市の鏝絵

別府市は大分県内でも鏝絵の濃密な分布地帯の一つで、日出町、山香町、安心院町、院内町の影響をうけた、鏝絵の存在が認められる。

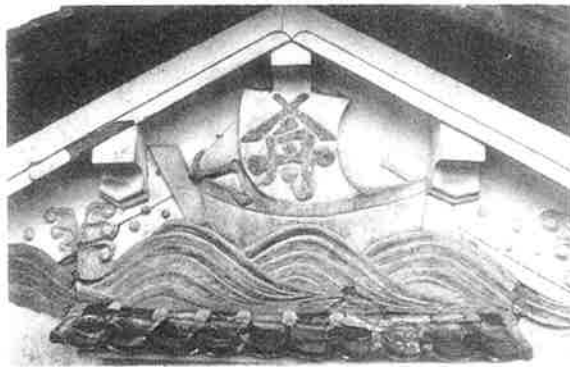
別府市で特に貴重だと考えられる鏝絵は亀川にある



火伏せの龍（安心院町）



牛若丸と弁慶（玖珠町）



千石舟と波の鏝絵（江戸末期の作）（九重町）

「光背をつけた仏から經典を授かっている僧」の意匠のものであるが。

別府市に於て、特筆すべき事は、天満町に存住した、地獄の鬼づくり（セメント製）の職人、小野氏の事があげられる。しかし、氏はすでに亡く、亀川中央町の旅館に「鶴と亀」の鏝絵が現存するのみである。しかし別府

市は、土地柄のせいかわ版に多様なものが見られる、行合町のまねき猫、田の湯町の茶の看板等、鏝絵は民衆信仰とは別の表現の一面も、持っている様に見受けられる。又、山間部の枝郷、東山、内成、朴の木から影戸を過ぎて庄内に抜ける道筋にも多くの鏝絵が見受けられる。



仏画の鍍絵(仏の顔が西洋風)



(不詳)



別府市東山(佐藤氏宅)

特に朴の木という地区は、大工、左官職のさかな所であったと言う。その中でも亀をひく人の意匠はきわめて興味を引くが、その意匠の意味は、明確に伝承されておらず意味不明である。又、神楽女、東山にも「亀をひく人」の鍍絵がている、この鍍絵の作者は朴の木部落の左官職、後藤のぶお氏と伝えられている。後藤氏もすで

に他界されており明確な意味は伝承されていない。今後調査は続けるが、どなたか御教唆いただければ、幸いです。最後に南石垣の安部氏宅の土蔵の釘戸に描かれた「蝙蝠」の意匠のものは、陽を嫌うコウモリを火事除けにした鍍絵であったが、おしくも五十七年に改築され現在は

別府市の鍔絵の分布

番号	所在地	家屋所有者	鍔絵の意匠	鍔絵の所在位置	製作年代	備考
一	龜川 温水	井上 史昭	龍とタカ	母屋	明治	
二	〃 内竈	溝部 みとし	波にうさぎ・亀	土蔵	〃	
三	〃 中央町	二宮 武臣	鶴と亀	旅館	昭二十年	地獄の鬼づくりの名人
四	〃 〃	宮成 氏	「不明」	母屋	不明	小野翁製作
五	〃 〃 (田町) 二一五	吉良 康幸	龍 (立体像)	馬屋	明治一六年	仏から教典を授かる僧
六	〃 〃 三一四五	伊藤 初治	しし (〃)	土蔵	明治二六年	現在にはなし
七	原町一―二五	後藤 タクシー	つる	土蔵	不明	現在にはなし
八	朴の木部落	庄直 氏	龍	戸袋	〃	職人 青柳鯉一
九	枝郷小平	後藤 太郎	福寿・徳・家紋大黒	母屋	昭和二七年	
一〇	〃	〃	巾着・雀	土蔵	〃	
一一	東山二〇〇九	佐藤 建喜	亀と人	土蔵	不明	
一二	〃	大野 豊吉	ほうおうとこま犬	土蔵	〃	
一三	〃 (城島)	田原瀬 喜蔵	亀と人	土蔵	昭和四年	職人 後藤のぶお
一四	神楽女	〃	〃	土蔵	不明	
一五	枝郷小平	安部 辰男	大黒天	母屋	昭和二七年	
一六	〃	〃	ほかけ舟・波うさぎ・花	〃	〃	

一七	野口中町九組	原和雄	福	土蔵	不	明	桜羊かん現在はなし
一八	〃	高木氏	茶釜	母屋	〃	〃	現在はなし
一九	亀川駅前	三ヶ尻定彦	恵比寿	母屋	〃	明治	現在はなし
二〇	内成中の迫二二九三	〃	宝珠	土蔵	〃	〃	五七年立替え
二一	浜脇	鶴田浩道	恵比寿大黒	母屋	〃	〃	網元
二三	北浜	平野氏	亀	〃	不	明	看板
二四	〃	阿部義人	猫一對	商家	昭	和	看板
二五	北浜二丁目四一	藤田氏	茶	土蔵	不	明	看板
二六	田の湯五九	大野靖男	虎	土蔵	明	治	
二七	朝見三丁目六一二	井上友光	龍	馬屋	明	治	
二八	南立石八九二	矢田氏	つる	土蔵	明	治	
二九	南石垣	荒金氏	徳	土蔵	〃	〃	
三〇	〃	安部喜一	蝙蝠	〃	〃	〃	
三一	〃	荒金信男	亀	母屋	〃	〃	
三二	〃	〃	四組	〃	〃	〃	

無い。

現在別府市に現存する鍍絵は表の如くである。

鍍絵のおこり 鍍絵がに世知られるようになったのは  
と伝播 伊豆の長八こと入江長八（一八一五～

九〇）の業績であるという。長八は静岡県松崎町で生まれ、天保十二年四月。二十七歳の時に長八が江戸に出て日本橋茅場町の薬師堂の建立にあたり、柱に漆喰で龍を彫刻したところ、左官の鍍で製作されたものと考えられない見事なものであった。その後、長八はさまざまな鍍絵の技法を編み出した。以降、この技法は職人の間に広がり江戸の商家をはじめ多くの家々に極彩色の鍍絵が流行したと言う。現在、大分はもとより、九州は、佐賀県、対馬、高原、四国の内子町、高知県、それから福島県喜多方、静岡県松崎、新潟県長岡市のサフラン製菓の土蔵と全国各地に散存している。その中でも、大分県は特に数も多く、まとまって残っている地域と言える。

鍍絵の技法 鍍絵は漆喰を素材として作られるもの

で、漆喰は牡蠣ガラを焼いて作ったカキ灰と石灰、砂を布海苔を混ぜて白で突きあわせたものである。

それにつなぎとして、麻や藁ワラを（す荷ま）を練こんで粘土状に練りあげたもので最後に、菜種油や鯨油、職人によっては廃油等、漆喰が鍍で伸びやすい様に、そして壁のツヤだし、又重要は役割として、雨水をはじく役目として使用される。その割合は職人によって、各自の好みに応ずる様である。

この漆喰に、鍍絵を施す場合に各種の顔料を混入させる。赤は紅殻（ベンガラ）酸化第一鉄。藍色はキンベル。浅黄色は藍色に蠣灰カキを多くしたもの、鼠色は灰墨を普通のノロで練る。等ある。

この他にガラス玉に銀箔を裏うちし動物の目にはめ込み、太陽があたると動物の目が輝くように作られたものなど自由な技法が見られる。小道具も多く使われ、エビスがもつ釣竿には竹、動物のヒゲは銅線、中には、流木を使用した例もあり、自由奔放である。

また名称も「鍍絵」のほか「壁絵」「漆喰絵」「漆喰細工」「漆喰彫刻」とよばれ、他に玖珠郡などでは



流木の中にタコとアワビが装飾される  
武蔵町のエビス

「鰻掛け」とよばれている。

漆喰を塗り絵を描きあげるのには、「鰻」が普通五、六種類使われたが、多い時は十数種も使用した左官もいたという。下絵については、依頼主の描かせた下絵をもとにしたと考えられる巧妙な図柄もあるが、左官自身の下絵による素朴で雅拙ではあるが自由奔放な図柄のものが多い。その為に調査は難行をきわめ、当時の風俗や流行を知る必然性が生じる、特に安心院の「外法の梯子」等は、大津絵の世界に始めて登場するものでありきわめ

て、珍しい例であると言える。

又、明治時代は、庶民にとっては、外国文化の流入の時代でもあった。日進日歩の新しい文物をとり入れることは、ステータスシンボルでもあったろう。コーモリ傘（バラソル）の鰻絵をはじめ、山香町野原の帯刀昭司氏宅の土蔵のようにローマ字の鰻絵が作られたり、そうかと思えば、竹田市の土蔵に描かれた「百姓」の鰻絵の様



長田家の鰻絵（安心院町）

に、百姓一揆を除けるため描かれた、と伝えられる鰻絵も存在した。この事でも判る様に明治時代は、急速に変



化したのであろう。大正時代に入ると鏝絵の秀れた作品は少なくなってくる。第一次世界大戦後の不況は農村にも暗い影を落しはじめ、鏝絵の製作も少なくなり自由奔放な図柄も単純な松とか家紋くらいのもとなっていく。その原因として考えられるのは、建築様式の変化である。タイルやセメントの普及、ペンキ塗りの看板の普及などが原因し、建築素材の変化がこの時期に始まり現在まで続いているという事である。事実、「現代に生きる職人たちの中でも左官職というのは厳しい状況に在る。戦後の日本の建築の歴史というのは、現場から左官職と畳職、瓦職、建具職を追い出してきた歴史だ。実に単純明快なものだ。日本の建築の近代化というのは工業化ということだ。工業化するわち工場生産化だ。専門用語で言えば湿式工法から乾式工法と言うことで、つまりは建築に現場から水という厄介なモノを追い出すことであった。左官は水の職人でもある。土を練り、材料を練り、水で溶かし壁や天井に塗り込んできた。近代化の敵であった。つまり左官職というのは近代に負けた職人の代表選手でもあるのだ。」上記の様な状況の中から負け

続けてきた職人である左官職が全国から伊豆松崎町にある、伊豆長八記念美術館設立の際に全国から左官職

人達が手弁当でかけた事実は記憶に新しい。

それよりも、江戸時代に生まれ、明治に生きた、我泉の左官職達は、今日の時代を予測し、いちはやく己れの時代を民家の壁に熱い思いとともに、塗り込めたのではなからうか、その職人達の多くの手形も、年々とその姿を消しつつあるのは、誠に残念なことである。しかし本年七月に、院内町の吉村氏宅の鏝絵が、新築の際に「仙人が鶴に乗って飛んでいる姿」長野鐵治（一八四八〜一九二七没）作の鏝絵を保存し、新築家屋の戸袋に移築された事と言い、九月には安心院町の衛藤氏宅に本格的な鏝絵が（龍・鶴・兔・ねずみ・家紋）犬飼町在住の鏝絵氏沓掛均氏により製作、落成された事は、喜びに耐えない。

しかし、何分にも個人の住宅、土蔵である事、広範囲に分布している事から、保存は極めて困難である。

しかし鏝絵は明治時代の庶民生活史の重要な文化遺産でもあり、貴重な庶民の芸術品でもある。このことは、

富士山にコーモリ傘の鍔絵



鶴にのる仙人  
(今年移築され保存された)



竹田市にあった百姓の文字



新築された鍔絵(安心院町衛藤氏宅)

今後において鍔絵の保存を考えると共に市民の文化創造への誇りの一つともいえよう。

註

「日出町誌」第八章P四〇一より抜粋拙著

結城喜明「伊豆長八」伊豆長八作品保存会刊

雑誌太陽(1988 No323)

P九四 石山修二筆「きょう日の職人」さん